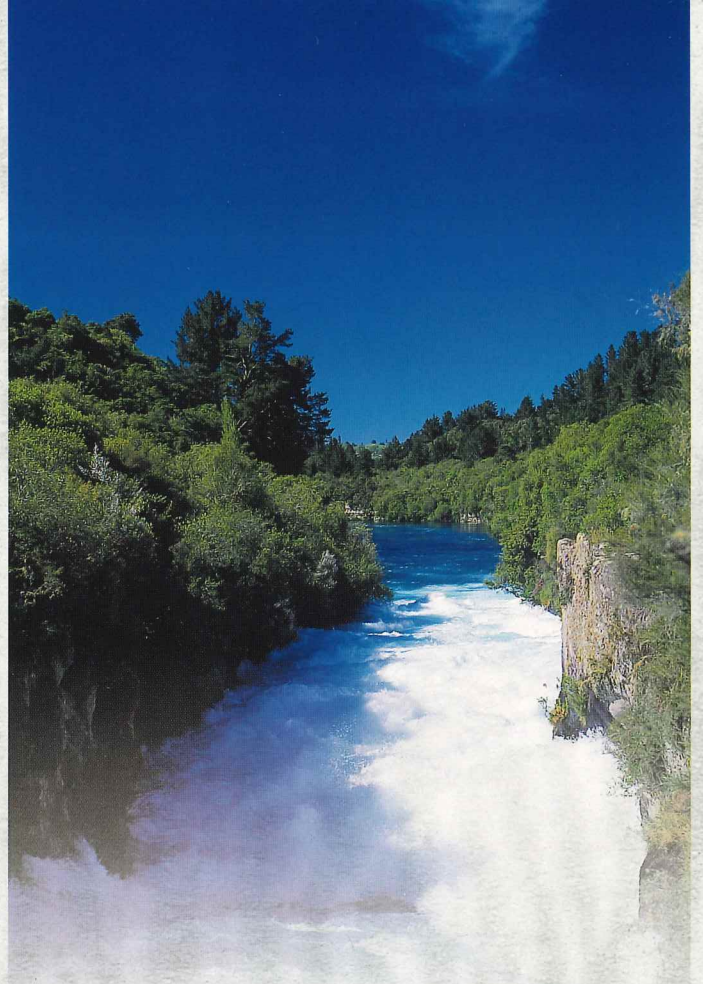


書道研究誌

# 書の光

8  
2023



Vol.660  
宮城野書道会

漢詩を味わう

第169回



## 夜雨 良寛

世上栄枯雲変態

世上の栄枯は雲の変態へんたい

五十餘年一夢中

五十餘年は一夢の中うち

疎雨蕭蕭草庵夜

疎雨蕭蕭しゅうじょうたり 草庵の夜

閑擁衲衣倚虚窓

閑しずかに衲衣のうえを擁して虚窓よに倚る

世の中の人の栄枯盛衰は雲の姿が変わるように移り変わっていく  
五十余年変転の生涯も一場の夢の中の出来事のようにであった  
小雨がさびしく夜の草庵に降りかかる中で  
静かに僧衣にくるまり窓の下によりかかる

《変態》 形を変化させること

《疎雨》 小雨

《蕭蕭》 もの寂しいさま

《衲衣》 ぼろ布で作った袈裟

良寛（一七五七〜一八三一）は越後出雲崎で名主の傍ら神官を務めた山本家に生まれ、幼名を栄蔵といいました。十九歳で出家して良寛と名乗り大愚と号しています。天衣無縫の人柄で民衆に愛されました。俳句や和歌もよく知られていますが、書はとりわけ優れていて美しい書を多く残しています。

漢詩は四十歳以降に詠んだとされる四百首余り伝わっていて、寒山や王維の詩の影響を受けていると言われます。しかしほとんどの詩は、絶句や律詩の押韻などの細かいきまり事を無視して、形式にとらわれずいわゆる規格外れのもので、良寛みずから「孰か我が詩を詩といふ。我が詩は是れ詩に非ず、我が詩の詩に非ざるを知つて、始めて与に詩を言ふべし」といつて自由にその時々的心情を詠っています。これは書についても同じ心構えで、王羲之や懷素、小野道風などを学んでいます。これに捉われず独自に表現したものがその殆どです。

数年前に『半夜』というこの詩と似た詩を紹介しました。

「一首を回らせば五十余年 人間の是非は一夢の中 山房五月黄梅雨 半夜蕭蕭として虚窓に灑ぐ」

『夜雨』と同様に、夜雨が降り注ぐ誰もいない寂しい草庵で修行に明け暮れた五十年間の自分を回顧している内容です。「夜雨」や「虚窓」などが場面を想起させてしみじみとした味わいがあります。

二十二歳で備中岡山の円通寺の国仙和尚の下で十二年に及ぶ厳しい修行を積み、その後は諸国を行脚しました。この詩を詠んだ五十過ぎのころの良寛は越後の國上山の五合庵によく定住しています。

「五十にして四十九年の非を知る」という淮南子のことわざがあります。良寛にとって五十年の是非は語るべくもなく、ただ夢のように通り過ぎたという感慨しかないように感じます。

参考文献・漢詩の辞典（大修館書店）・書道全集（平凡社）

晨を凌あして西郭せいかくを出いず 招提しょうだい 新雨過ぐ 日出しゅつずるも人に逢あわず 院いんに満みちて風鈴ふうれい語る

凌晨出西郭 招提道新雨

日出不逢人 風鈴語

《大意》朝が明けきらないうちに西の城郭を出た。寺院には新たな雨が通り過ぎたあと。日が出ても人には出逢わない。

ただ、風に鳴る鈴の語りかける音が中庭いっばいに満ちていた。(王漁洋詩「雨後天寧寺に至る」)

岸火がんか 孤舟こしゅう宿しゆくし 漁家ぎよか 夕鳥せきちようかえ還かえる

岸火孤舟宿 岸火孤舟宿

漁家夕鳥還 漁家夕鳥還

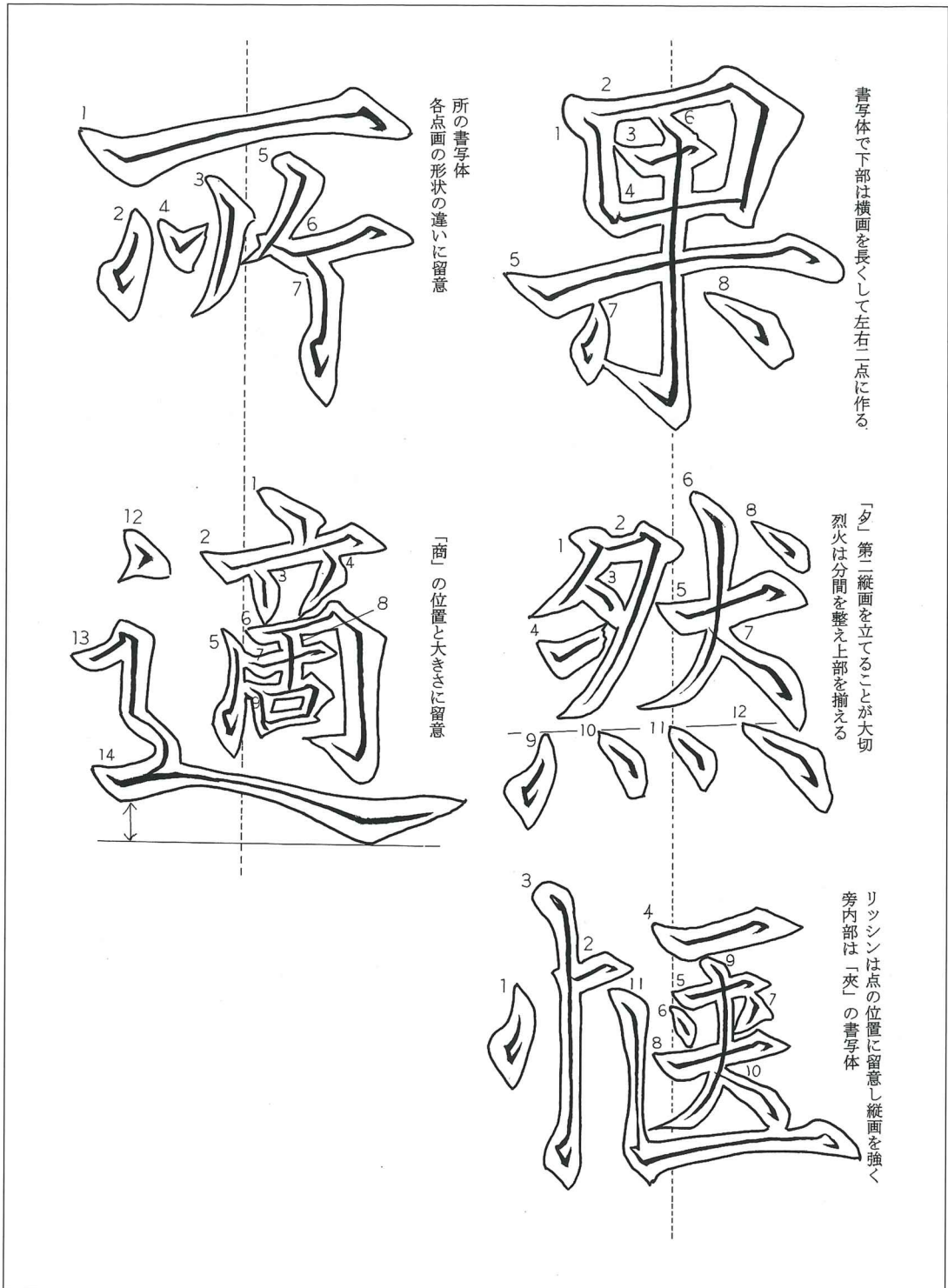
《大意》岸辺の家に火がともり、一艘の小舟が停泊している。漁家にはねぐらに帰る鳥が飛んでいる。(王維詩「河北城楼に登る作」の一節)

読み

果然<sup>かせん</sup>として適<sup>かな</sup>する所に愜<sup>かな</sup>う  
(予期した通りの所で辿り着いた処に満足している。)

果然  
愜然  
適

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について  
規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。  
初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。  
規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「藍田山の石門精舎」

(前半)

落日山水好

落日 山水好し

漾舟信歸風

舟を漾わせて 歸風に信す

玩奇不覺遠

奇を玩んで遠きを覺えず

因以縁源窮

因りて以て源を縁ねて窮む

遙愛雲木秀

遙かに雲木の秀でたるを愛し

初疑路不同

初めは路の同じからざるかと疑う

安知清流轉

安んぞ知らん 清流轉じて

偶與前山通

偶々前山と通ずるを

捨舟理輕策

舟を捨てて輕策を理む

果然愜所適

果然として適する所に愜う

老僧四五人

老僧 四五人

逍遙蔭松柏

逍遙して松柏に蔭う

(後半に続く)

草書

行書

所適 果然愜

所適 果然愜

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

老僧 四 五人

所適 果然愜

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

細字部昇格試験課題実施要項

- ・左記の三体千字文の一節を所定用紙に揮毫
- ・欄外に支部・段級・氏名を明記して下さい
- ・〆切九月二日(土)・受験料三,三〇〇円(税込)

音

ケイソウサイハイ  
シヨウクキヨウコウ

略解

頭を地につけ再拝し  
おそれかしくみ丁重に祭るべきである



佐藤象雲書

※一級以下の方の試験課題です。実施要項は四十二頁をご覧ください。

| 支部               | 順位 | 氏名 |
|------------------|----|----|
| たよりあらばいかで都へ告げやらむ |    |    |
| 今日白河の関は越えぬと      |    |    |

※今月の月例出品はお休みです。

平 兼盛

和泉溪石 先生書



# 浄則濁類

浄ければ則ち濁類……

# 濁類 浄則

象雲臨

■ 褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西暦六五三年)の臨書

(73)

## 「浄則濁類」

褚遂良は虞世南と欧陽詢とともに初唐の三大家と言われますが、高宗が隋を滅ぼして唐が建国されたのは六一八年で、虞世南と欧陽詢はすでに六十歳を越えていました。二人とも青壯年期を隋代で送っているのが隋代の書家とも言えますが、楷書の名品と呼ばれる虞世南「孔子廟堂碑」と欧陽詢の「九成宮醴泉銘」がともに唐の太宗時代の作品のために初唐の三大家と言われています。

褚遂良はこの二人より三十歳ほど若く虞世南に師事しています。虞世南と欧陽詢はともに太宗の庇護のもと亡くなり幸せな晩年だったようですが、褚遂良は太宗の没後に高宗にも重用されましたが、高宗が武昭儀を皇后に冊立しようとしたことに反対したため武氏が則天武后となってからは冷遇され、愛州(現在のベトナム)まで左遷され不遇の中に没しています。

今月は「浄則濁類」の臨書です。四文字目「類」の偏下部は書写体で分のように書かれています。

合也心遠體留

(五) 合の也。心遠しく體(留まるは) …

象雲臨

■孫過庭・書譜(初唐・西曆六八七年)の臨書

(54)

合也心遠體留

「合也心遠體」

書聖と冠されて語られる王羲之の書は、その書譜の特徴の一つに料紙の折り目に起因する節筆があげられますが、今月は五文字で意味は成しません、この節筆が顕著に表れている部分を臨書します。とくに前回は登場した「也」は節筆が効果的な変化となっているものが多く見受けられます。参考まで前回の「也」を含めて四文字を掲載します。

この書譜は孫過庭の書論の草稿です。孫過庭は文章の内容に主眼を置いて書いていく訳ですが、草書の結体も素晴らしく変化も文字大小と線の太細が多彩です。料紙の折り目で線が変化する節筆ですが、孫過庭はこれを意識的に利用しているようです。臨書に際しては節筆をどう表現するか自由ですが、実際に紙を山折りにして書くなどいろいろ試してください。

